



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アイヌ民族と文化交流としての観光の新展開に向けて
Author(s)	北原, モコットウナシ; 岡田, 真弓
Description	2021年度オンライン観光創造フォーラム. 2021年11月11日. オンライン. 北海道大学観光学高等研究センター.
Relation	観光創造フォーラム2021講演録 / 山村高淑 編 Proceedings of Tourism Creation Forum 2021 / Edited by Takayoshi Yamamura
Citation	CATS 叢書, 16, 39-66
Issue Date	2022-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/84835
Type	departmental bulletin paper
File Information	CATS16_3.pdf



アイヌ民族と文化交流としての観光の新展開に向けて

北原 モコットウナシ

北海道大学アイヌ・先住民研究センター 准教授

岡田 真弓

北海道大学観光学高等研究センター 准教授

1. 趣旨説明

岡田：これより、北海道大学アイヌ・先住民研究センターの北原モコットウナシ准教授をお迎えし、「アイヌ民族と文化交流としての観光の新展開に向けて」というタイトルで、オンラインフォーラムを始めていきたいと思います。現在、北海道各地でアイヌ民族やアイヌ文化がかかわる観光振興が進んでおります。2019年には、アイヌ民族を先住民族と明記したアイヌ施策推進法が成立し、2020年にはアイヌ文化の復興及び発展のための国立施設、民族共生象徴空間（愛称、ウポポイ）が北海道の白老町に開設されました。また、アイヌ民族や文化をテーマとしたアニメ漫画や小説などの影響もあり、アイヌ民族や文化に対する社会的な関心が高まっています。

こうした状況を受け、北海道内各地では、地域のアイヌ文化を核とした観光コンテンツの企画や観光プロモーションを進める動きが広がっています。一方、マイノリティー文化を観光の文脈で取り上げる際には、ゲストやホストは多様な立場が想定され、どの立場に立つかによって観光の意義も変わります。本フォーラムでは、アイヌ民族というマイノリティー集団の立場から、ホストとして観光の実務に当たってきた北原先生にご登壇いただき、文化交流を促し学びの機会となる観光振興を考える上でのポイントをお話させていただきます。

本日は講演いただきます北原モコットウナシ先生は、樺太アイヌの信仰、物質文化、口承文芸などを専門に研究されています。2005年から2010年まで白老町の旧アイヌ民族博物館の学芸員として勤務され、体験プログラムや資料映像などのコンテンツ企画作成に従事されました。近年では、札幌駅の地下歩行空間にあるアイヌ文化を紹介するエリア、アイヌ文化発信空間ミナパヤ、ウポポイでの展示体験学習プラン、また、道南バスによるアイヌ語車内放送、そして北海道観光振興機構とともに『アイヌ文化・ガイド教本』の改訂版作成などに携わってこられました。それでは、北原先生から「マイノリティー文化観光と学び—アイヌ民族の事例」のご講演をお願いしたいと思います。

2. マイノリティー文化観光と学び—アイヌ民族の事例

2-1 はじめに

北原: 私は文化人類学を専攻しております、さっきご紹介いただきましたように樺太アイヌの宗教儀礼について学んでまいりました。博物館で勤務をする中で、いろいろと社会に共有されている感覚と、研究機関の感覚のギャップに驚きながら、どうやってこれを橋渡ししたらいいのかということを考えてまいりました。

それは、1つにはもちろん教育に携わる、そのはしくれの者として少しでも社会に貢献したいということがあるわけですが、同時にアイヌ民族についての理解を深めるということは、自分や家族を含めた私たち自身のためでもあるということ、それなりに専門外のことまで、必要にせまられて取り組んできました。今日は、そのあたりのことを少しご紹介できればと思います。

はじめに、アイヌ民族についてよくご存じの方でも、「和人」という言葉はあまり聞いたことがないという方もいらっしゃると思うので、私の話の中で出てくる言葉について、簡単に定義をしておきたいと思います。それから、従前の観光の典型的なあり方ということについて見ます。

その後、アイヌ民族の歴史について、特に近現代以降の歴史について簡単に見て、それからいわゆる狩猟採集民族といわれるアイヌ文化と農耕民族といわれる日本文化、和人文化にも実は連続性がある。そういった文化のとらえ方の話をしまして、あらためて従前のアイヌ文化観光がどういう点で課題を持ってきたかということを確認したいと思います。

それを踏まえて、これからの観光のあり方。観光というのは、言い換えれば他者を表象することであるとか、あるいは、自分たちの集団が観光のテーマになっている場合には、自己表象でもあるということで、このあり方についていくつかポイントをまとめたいと思います。最後に、私自身がこれまでお手伝いしてきた実践例からいくつかお話をしたいと思います。では、よろしく願いいたします。

2-2 アイヌ民族と観光

最初に用語の整理ですけれども、日本人という言葉は皆さんよく耳にすることがあると思います。日本人というのは日本の人ということですが、ここには実は2つの意味が重なっています。1つは国籍の問題ですね。日本国籍。言い換えれば日本国民。そしてもう1つは民族集団としての日本人。日本語、日本文化をつくってきた、そういう人々としての日本人。

この2つはほぼ同じもののように感じられますが、実は少し違っていますね。日本社会に暮らしている人の全体の中に、いわゆる民族集団としての日本人がいる。この日本社会の人々は、たいていは日本国籍を持っている人であって、その中に民族集団としての日本人がいます。しかし、この日本人があまりにも多数である。ほとんどすべての人口をこの日本人といわれる人々が占めているので、日本に暮らしている人は、みんな我々と同じ日本人であるという感覚を無意識に持って生活するようになります。

しかし、これは実態とはズレている錯覚であるので、実際には、そこにほかの民族集団がたくさん暮らしている。例えば琉球の人々とか、もともと外国籍で日本に帰化した人々、それからアイヌ民族が暮らしていますし、日本国籍は持っていないけれども、外国人が280万人ほど暮らしているといわれています。ですから、多数の民族が日本社会の中には暮らしていて、そのうちの多くの人々は日本国籍を持っている人でもあるということです。

このあたり、うまく話が通じないことがあって、結局アイヌは日本人なんですかというふうに聞かれることがある。その場合の日本人が何を指しているのかということが、やはりかなり混乱しているんですね。日本国籍を持っているという意味であれば、日本国の人である。しかし、すなわち日本人と同じになった、民族的に日本人と同一になったかといえば、そういうことではない。ですから、私たちのこの社会には、実は国籍と民族の2つのアイデンティティーが重なっているということ、いつも確認しておく必要があります。

この民族的な立場の違いが、ゲストやホストといった立場に重なってきます。そして、この日本人という言葉は非常にややこしいですね。国籍の話をしているのか、それとも民族性の話をしているのかよく分からないということで、少し違う名前を付けて整理をした方がよからうということがいわれます。

沖縄の場合は、伝統的に「やまとんちゅ」という言葉が使われる。それに対して、アイヌ語では「シサム」といったり、北海道の学校教育などでは、あるいはアイヌ史の研究では、平和の和に人と書いて「和人」という言葉が使われたりします。「やまとんちゅ」や「和人」、これが民族集団としての日本人のことであり、日本国籍を持つ人という意味での日本人とは区別して使う。これがとても重要なことだろうと思うわけです。

そして、いわゆる典型的なアイヌ観光のあり方というのはどんなものだったかということ、ここで振り返りますが、こういうキャッチフレーズにそれが集約されていると思います。「私たちの知らないアイヌ文化を見にいこう」。このような、おおよそこれに類する売り文句で、観光に人々を誘ってきたということがありますが、場合によっては、これが文化ではなくて「アイヌ人を見にいこう」。人間を好奇心の対象として見にいこうという広告が打たれることもあって、そのような広告のあり方は差別的だということで批判を受けるといこともままありました。

私たちの知らないアイヌ文化ってどんなものなのだろうかという言葉は、和人から和人に向けて発せられている。このような広告を打って人々を誘うというのは、和人が経営する

観光業者であることが多い。そして、これを受ける側も和人である。

中には、ホスト側にアイヌ民族がいることはもちろんありますが、そういった人々はどちらかというと末端の現場で働いていて、観光のあり方を決めているのは、やはり和人資本であることが多かった。そして、こういったキャッチコピーができるのはなぜかという、1つはかつて異文化といえば海外のことだった。つまり、日本国というのはやはり和人だけが暮らしている、そういう空間であるという意識が強かったので、外国に行けば変わった人々がいる。日本国内はみんな均質だ。そういうイメージがあります。これは、和人的価値観を標準とするホモソーシャルな空間が日本国内に存在してきたし、今もあるということになります。そこで例えば異文化を、あるいは異文化の人々を物珍しいもの、珍奇なものとして扱ったり、敬意を欠いた扱い方をしたりしても問題化するということは、これまであまりなかった。ですから、今日でもメディアでは外国人を非常に嘲笑的に扱うといったことがいまだに続いていますけれども、そういったことがなぜ起こってきたかという、テレビを見ている、あるいは観光に参加する人々はみんな同じ立場であって、違う立場の人は日本の外側にしかない。こういう感覚が強くなるからですね。

参考として、某テーマパークのアトラクションを見てみましょう。これはもともと海外資本で日本に招致して作られたテーマパークです。そこに乗り物が急速に落下する絶叫マシンのたぐいのアトラクションがあります。このアトラクションは「ある古いホテルに客が入っていく。そのホテルのオーナーというのは世界中の珍しい物を集めてくるトレジャーハンターだった」という設定になっています。このオーナー／トレジャーハンターは、ヨーロッパ系のかなり高齢の男性で、あるとき、この男性がアフリカの架空の民族のところを訪れて、その民族が大切にしていた呪いの神像というものを盗み出した。その呪いの神像の力によってトレジャーハンターは異次元に飛ばされてしまって、以来、行方不明になっている、という設定なんですね。来場者はそういういわく付きのホテルに入って行って、そして「トレジャーハンターが行方不明になった、その現場であるエレベーターに乗り込んでみよう。無事に帰ってこられるといいですね」というような形で恐怖感をあおる。そういう設定になっています。もちろん観客は全員無事に出て帰っていくわけですが、至る所にその架空のアフリカの民族、「部族」というふうに表現されていますけれども、非常に差別的に表象された人々が描かれています。それから、このオーナー／トレジャーハンターがかなり上から目線でその人々に接したり、宝物を盗み出したりと犯罪的な行為が描かれるんですが、そのことの問題性というものは、このアトラクションの中では一切指摘されないわけですね。

私がおこへ遊びに行った際にもものすごく違和感を感じたのは、現実にはアフリカという土地があつて、そこにはさまざまな民族がいて、その実在する民族の衣装などを表象に使いながら架空の民族として描いてしまう。そのように他者の存在そのものをコントロールできて、自分たちの資源として利用可能なものとする。そういう大変侮蔑的な姿勢がこのアトラクションにはあるというふうに思います。また、ヨーロッパ系の人物がそこに行って、案内

をさせて宝物に触れてそれを盗み出してくる。これはやはり植民地主義を背景とする取奪というものを描いていることになるわけですが、ここで問題なのは、来場者にそういうことを問題視させるような要素がまったくないということですね。つまり、「秘境に行つて、『原始的』な人々のところに行つて、宝物を盗んでくるというのはわくわくすることである」というふうに描かれている。そういうふうにしてうまく盗み出してきたんだけど、呪いによって不幸にして行方不明になってしまった。そういう人物の体験を来場者に追体験させる設定になっている。そしてもっと恐ろしいのは、このアトラクション自体はフランスとかアメリカの、同系列のテーマパークにもあります。ところが、そちらのアトラクションはホラー設定なんです。「なぜか人が行方不明になる不思議な場所に行つてみよう」という設定になっている。このアトラクションを日本に導入したとき、もとの設定をそのまま使えない事情があつて、そこで日本独自の演出としてこの差別的な設定が導入されたようです。

ここには、日本国内における異民族、異文化に対する扱い方というのが凝縮されていると感じます。なぜこういうことができちゃうのかというと、日本社会にはいわゆる米兵や様々な職業にあるアフリカ系の人々が暮らしているとか、その人々と結婚した家族や生まれた子供、アフリカ系の属性を自分自身が持っている人々が日本国内にはたくさんいるわけですが、そういうことが想像できないところに大きな問題があると思います。

つまり、日本社会には同質な人しかないというふうに漠然と感じていて、そういう信念があつて、違う人々がいるということを想像する力が抜け落ちている。また、描き方によってその他者が傷つくこと、あるいは日本国内から申し立てを受けること、そういったことへの想像力が欠けているということが、ここの背景にあると思います。そして、同じようなことがアイヌ民族をテーマにした観光や広告にもしばしば見られる。あるいは漫画などのコンテンツにもしばしば見られて、そして場合によっては申し立てを受けて取り下げということが起こってくるわけですが、こういった問題は同じところに根があるというふうに感じます。

2-3 アイヌ民族の歴史と文化

さて、ここからアイヌ民族の基本的な情報と歴史について見ていきたいと思います。アイヌ民族はどこにいますかと一般の方あるいは学生に聞きますと、北海道のどこか山の方とおっしゃる人が多いんですね。例えば北海道東部に阿寒というところがあるので、阿寒には「アイヌコタン」という場所があると知っている。白老というところにはアイヌの村があるのを知っているというふうに、北海道の中の、それも都市部ではないというイメージを持っている人が多い。

北海道大学の学生も、札幌にもアイヌが暮らしてきたということを説明しても、なかなか通じなくて「オホーツクのどこかにいるんですね」と、先入観が変わらない人がいます。そうではなくて、北海道中はもちろんどこにでも暮らしてきましたし、本州東北部、それ

から樺太南部、そして千島列島の全島にアイヌは暮らしてきました。そしてもっと南に行きますと、和人（シサム）が暮らしていて、琉球の人々がいて。それから朝鮮半島にはアイヌ語でカウレンと呼ばれる人々がいました。ですから、アイヌ語の中にこういう言葉が入っているということは、かなり距離がありますが、朝鮮半島の人々を直接あるいは間接的に知っていたということが分かります。歴史的には、朝鮮からの使節が漂流して、礼文島に漂着したという事実がありますので、もちろんポイント、ポイントでは直接接触していますが、おそらくもうちょっと広く朝鮮半島の人々のことが意識にあったというふうに思います。

それから、トゥングース系の諸言語を話すさまざまな民族が樺太およびロシア極東から沿海州の地域にかけてたくさん暮らしていて、一部を紹介しますと、ウイルタ、ナーナイ、そしてウデヘという民族がいる。それからニヴフ語という、またまったく系統の違う言語を話す人々がここに暮らしている。カムチャツカ半島にはイテリメンという人々がいる。13世紀ぐらいになりますと、カーカンという首長、ハーンのことですね。ハーンをいただく民族がこのあたりにやってきて抗争を繰り広げたり、あるいは朝貢関係を結んだり、交易などを行ったりした。

次にマンチウ（満州民族）が中国最後の清王朝をつくり、その後17世紀になると、ヌチャ（北方民族の言葉でロシア人）がやってきた。こういったさまざまな民族が周囲に暮らしており、環日本海地域を舞台にしてこうした諸民族の交流が盛んだったということが分かっています。ですから、例えば、私は樺太の宗教のことを調べていますが、樺太アイヌが作るお守り像と朝鮮半島で作られる像が大変よく似ているんです。こういうちょっと不思議な、しかし当然なのかもしれないという文化の類似性がたくさん見られます。

このような配置で人々が暮らしていたのは、明治時代に入るまでの近代まででした。近代に入ると、北海道までがまず明治の初年に日本の領土になります。それまで日本国は函館周辺の和人地といわれるところまで、その先は外国という扱いでした。ところが、ロシアとの領土争いが幕末ぐらいから起こってしまっていて、明治になったところで、ここが日本の領土だということが宣言されます。それとともに南の人々が北に移住してくるということが起こります。北海道で暮らしていたアイヌは、まず日本語の名前を名乗るのですとか、土地制度などもふくめ、日本政府が決めた規則に沿って生活をする。そして、生活習慣も日本式に変えていくということが進められていきます。

少し歴史が進みますが、第2次大戦の敗戦によって、それまで日本の占領下にあった南樺太、それから千島列島はソビエトの侵攻を受けます。これによって、この地域に暮らしていた人々は北海道以南に移住することになりました。私の祖母はもともと樺太西海岸の出身ですけれども、敗戦の年に余市町に避難して、そこで私の母が生まれました。それ以来、この国境がここで確定したまま現在に至っています。

ですから、アイヌといえば北海道にいらっしゃるんでしょうというのと、戦後の状況を見ると確かにそうですが、もともとは国境に関係なく非常に幅広い地域に暮らしてきて、本州ばかりでな

く北方の諸民族、諸文化と接しながら生活してきた。敗戦によって、今多くが北海道以南にいるという状況です。

私の母は余市で生まれまして、成人してから東京に働きに行って、そこで私が生まれました。関東近辺にも数千人単位のアイヌ民族がいるということが分かっている、それから名古屋や大阪といった都市にもやはり人が移り住んでいて全国各地で暮らしています。アイヌではない多くの人、北海道の人でもそうでしょうけれども、特に本州の人は、今まで一度もアイヌに会ったことがないというふうに感じていると思います。しかし、実際には日本中に生活しているんですね。

なぜ、ではアイヌに会ったことがないと感じるかという、それは、例えば容貌、容姿、生活習慣が関係しています。私は今 T シャツにパーカーで話をしていますが、こういう身なりですとか食生活ですとか言語ですとか、いろいろなことでほかの人々との差がほとんど目立たなくなっている。それはさっき言いましたように、明治に入ってから日本化が強烈に押し進められたということがあって、今日ではほとんど差異が見えづらくなっているということがあるわけです。

さて、近代以前のアイヌの生活はというと、採集を行ったり、それから狩猟を行ったり、漁労を行ったり、交易を行ったり。こういうことでアイヌ民族というのは狩猟採集民族であり、したがって日本文化とははっきりと線引きができて、まったく異質なものであるというようにみなされることが多い。しかし、実はそこにももちろん個性はあって、さまざまな点で連続性があるということをお話したいと思います。

例えば、北海道大学植物園博物館にも収蔵されている樹皮性の着物。これはハルニレ、オヒョウ、シナの木の皮をはがしてきて、それを処理して繊維を取り出し、それを柔らかい糸にして機織りをして反物にして、アットウシという着物に仕立てます。このアットウシは小学校の授業なんかでアイヌ文化学習をやると、必ず紹介されます。ですから、木の皮から着物が作れるんだというので多くの人が驚きますが、実は本州でも同じようなものがずっと作られてきた。今日でも産物として使われているということは、地元の人のご存じだと思うんですが、日本全体だと少し知名度が低いかもしれません。例えば秋田県にシナ布というのがあって、シナの木の繊維から反物を作る。アイヌと同じ素材ですね。シナの木の糸を使って着物を作ったり、今日ではバッグとか和服の帯にしたりとか、そういう使われ方が好まれているようです。それから静岡の葛布とか岡山の藤布のように、全国各地にこういう自然素材の布というものは残っていて、また仕立て方もよく似ています。細かい説明は省きますけれども、これは和人の労働着のスタイルで実用本位のあまり装飾性のないスタイルですが、それがほぼそのままアイヌの着物にも当てはまるくらい。タグを付けずに博物館の中に収蔵していたら、これがアイヌ資料だといわれてもまるで分からないくらいよく似ています。

強いて違いが何かというと、文様が入っていることです。文様がアイヌの着物らしさですが、これを取り払ってしまえば、こういう和人の野良着、労働着とまったく同じようなもの

になる。おそらくこういう自然の繊維を使った着物の作り方の技術というのは、南からアイヌに伝わっていったというふうに言われている。一方、文様装飾の技術というのは、より北の方につながっていくといわれ、動物や魚の皮を使った着物の中で形成されてきた装飾の技術がこの着物に重なって、アイヌ的な着物スタイルが生まれたと言われています。こうして見ると、どこまでがアイヌの文化でどこまでが北方文化で、どこまでが和人文化でということが、そんなにきれいに分けられないことが分かります。グラデーションのように重なっていて、やはり当然ながら、非常に近い地域で隣り合って暮らしてきた民族ですから、お互いの文化がよく似ているということがあります。

それから、文様に特色があるということを申しましたけれども、文様に使われているそれぞれの要素を見てみると、実は非常に広い地域に共通したものが多いということが分かります。例えば、これは和太鼓によく施されているともえ文様というものです。アイヌ民族の木製品なんかに、あるいは布製品にもよく使われる文様です。

ともえというのは、ともえ投げとか、ともえという漢字とか三つどもえとか、ぐるぐる一緒くたになって転がっているというイメージがあるので、てっきり私はこの文様そのもののことをともえというと思っておりました。しかし、もともとは弓を打つときに左手に着けるプロテクターのことを「とも」というんだそうです。そこについている絵だからともえというので、日本語の言葉とこの文様がぴったり一致しているかのように思うけれども、そうでもないということが分ると、ちょっとこの模様の見方も変わってきます。それから琉球漆器にもともえがあつて、韓国の太極扇にもともえみたいなものがある。

類似した文様の要素は、もっといろいろな地域にあります。例えば、イギリスのケルト文様の中にも見出すことができます。これは装飾写本とあって、聖書に華やかな装飾を施した写本ですが、例えばここにともえ文様が見えています。ケルト文様の解説書には、ともえ文様の様々なパターンが掲載されており、二つどもえとか三つどもえのようなものもあります。ケルト文様とアイヌ文様はあまりに離れていて、関係があるのかどうかということを手を論じるのは難しいですが、8世紀とか9世紀ぐらいからこうした文様がケルト文化圏でも作られていて、アイヌ文様と平行して存在しているということは少なくとも指摘できます。私は、これはおそらく伝播の関係にあると思っています。もちろんケルトと、例えば朝鮮とか沖縄が直接結び付くわけではなくて、間にたくさんの民族が暮らしていますから、それぞれの地域の中で共有されていって、そして結果的には非常に離れた地域によく似たものがあるという状況が生まれたと思います。

例えば、ともえ文様はポルトガルやギリシャといった南ヨーロッパにもありますので、そうすると、中東を介してすぐにアジアまでつながってくるということは考えられます。それから、和文様の中にもアイヌ文様に共通するものがあります。例えば、寺院の装飾によく見られる工字つなぎと呼ばれる和文様がありますが、類似した要素がケルトのレリーフの中にも用いられています。私たちがアイヌ文様だと思ったり、和文様だと思ったりしているものは、実は非常に広い地域、ユーラシア全体に共有されてきたものでもある。ですから、地

続きであるし、しかもその地続きの範囲というのは、思ったよりずっと広いのではないかと
いうことです。

今コロナがまん延しているので、新聞で流行病のとらえ方のことを紹介する記事を書き
ました。その中で、アイヌ民族のカムイは非常にたくさんいて、多神教であって、しかも動
植物ばかりではなくて、火とか水とか風とか自然現象にも神が宿っている。そして、天然痘、
疱瘡という病気を広める神までいるということが紹介されて、読者の方に驚かれたりする
わけです。私も博物館で解説を始めたころはよくそういう説明をしていたんですけど、実は
疱瘡の神というのはアジアに非常に広く見られる、一般的なものだということを最近知り
ました。

日本でももちろんこの疱瘡神というものが考えられていて、江戸時代にはこの疱瘡神を
描いた絵が盛んに売られたそうです。それからアジア地域にも疱瘡神のような神がいるよ
うで、起源はインドではないかというふうにいわれています。神のとらえ方1つとっても
決して他と無縁なものではなく、むしろかなり広いアジア文化圏の中にアイヌ文化も属し
ていて、ただ、若干の個性があるということはいえるかと思います。時間の関係で、詳細は
割愛しますが、神話や民話のたぐいを比較すると、やはり非常に広い地域、少なくともユー
ラシア全体とか、場合によっては北アメリカなどにも類似の話が見当たることがあります。

さて、着物、文様、それから精神文化、神話などについて見てきましたが、それ以外のと
ころでもさまざまな類似性、連続性があるということを見たいと思います。言葉はわりと1
つの均質な集団みたいなものが想定しやすいので、アイヌ語集団、日本語集団というふう
に、まあまあお互いに均質性を持っている。しかし、隣り合った地域に暮らしている人々はお互
いの言葉を覚えて、子供同士で遊んだりしているうちに自然とバイリンガルになるという
ことは珍しくありません。ですから、ここの人とここの人を比べれば、まったく違う言語を
話す異質な人だというふうに分ける目安にもなりますけれども、必ずしもどこに行っても
明瞭に分けられるというわけではない。例えば、畑作文化ということで見てみると、和人文
化ではよく畑作が行われる一方、アイヌ民族も畑作は行ってきた。ですから、日本人は農耕
民族、アイヌは狩猟採集民族みたいにすっぱり切れるものではないということです。狩猟に
ついて見てみると、確かに多くの地域でそれは行われていますが、和人も本州、四国、九州、
それぞれの地域で狩猟を行ってきまして、今でも継続されていますね。ですから、農耕民
族だって狩猟をしないわけではない。それから漁労でいえば、さらに多くの人々が共通の文
化的要素を持っているということになる。ただ、どういう動物を取るか、どういう魚を取る
か。それを女性が行うのか、男性が行うのかとか、細かく見ていけば文化の個性というの
はもちろんあります。しかし、農耕民族、狩猟民族みたいに大きなくくりをするときには、そ
う簡単にすばつと切れないということが分かります。

それから、和人といえば稲作文化だという意識が強くありますが、日本の中でまったく稲

作をしない地域というのものもあるわけですね。ですから、和人が均質な1つの集団だ、アイヌが均質な1つの集団だ、そして両者ははっきりきれいに線引きすることができるというのは、やはり一種の錯覚というか誤解ともいえます。そして、近代以降、和人とアイヌをはっきり分けるために違いの点が強調されてきたために、こういう連続性があまり見えなくなってしまうのだと思います。

2-4 「幻想のアイヌ観光」

少し遠回りしましたが、近代以降、特にアイヌが日本国に統合されていく中で、もともと文化的な連続性はあるし、言語的な差ももうまったくなくなった。そして、どこにアイヌがいても、いるということに気付かれないほどの差異の減少ということが起こってきたわけです。こうした歴史的経緯を踏まえると、従前のようなアイヌ観光のスタイルというのは、本当は成り立たないはずですが、しかし、それを無理やり成り立たせるためにある種ちょっと無理がかかっているということがいえるのではないかと思います。

「幻想のアイヌ観光」というふうに書きましたが、この観光の問題点をいくつか見えてきたいと思います。まずはアイヌ民族とかアイヌ文化に対する強い見下しや侮蔑が、さまざまなキャッチコピーの中にも入ってきている点です。これは必ずしも意識されているとは限りませんが、「素朴」であり、「停滞的」であり、「どこでも同じ」でありというような、そういう評価に現れることもあります。それから原始性の強調、よくあるのはかがり火のイメージです。実際にアイヌはそんなにかがり火はしませんが、かがり火が照らす闇の中で踊っているみたいな、そういうおどろおどろしい描き方がされることがあります。また、外見の違いの強調ですね。顔立ち、彫りが深いであるとか眉が濃い、ひげが濃い。そういう外見の違いを強調して描いて、しばしばそれが差別的なニュアンスも伴っているというものです。それから滅びのイメージ、もうほとんどいなくなってしまった、滅びつつあるということがずっと強調されている。これは以前からずっと同じことがいわれているので、いつ滅び終わるんだと思うほどですが、ずっと滅びかけということになっている。

これは一種のロマン化といえます。もうすぐ消え去ってしまうので、今のうちに見ておきましょうみたいな、滅びるということを強調することが、ある種の付加価値をそこに帯びさせるような、そういう効果を持っていると思います。そして、この滅びの強調の中には必ず、なぜ滅びるのかということは問わないわけですね。例えば、文化がかつてに比べてあまり見られなくなったとか、言葉話す人がもう誰もなくなったとかというのは、日本の植民地主義の結果ですが、そういうことを一切問題視しない。自然に動物が減っていくかのように、滅びるということがロマン的に語られるのが特徴だというふうに思います。

それから、見下しや排除というのが分かりやすい差別だとすると、分かりにくい差別として聖化というものがあります。これは見下しの反対で、極端に持ち上げることによって、やはり異質性を強調するものです。しばしば、さまざまな生活文化の中にマジカルな意味づけ

がされます。例えば文様は魔よけである。何かというと魔よけが皆さん大好きですね。そういう、当事者がそれほど言っていなかったことを過剰に強調して、そこを印象づけようとする。あるいは自然との結び付き。具体的な内容は語られませんが「自然と協調して、ともに生きて暮らしてきた」ということが再三語られる。自然と協調して生活するということは和人もしてきたはずです。ですから、よく考えれば、これはどこの民族にも当てはまるにもかかわらず、アイヌ民族の場合は何しろ自然が強調されます。解説の文言にも現れますし、イメージ映像やポスターの撮影現場を考える際にも自然との結びつきが強調されます。本当は屋外で踊ることはあまりありませんが、森の中で踊っている様子が撮られる。

ほぼファンタジーのような描き方、ちょっと悲壮感のある、はかなげな悲しいイメージとか神秘的なイメージを出すためには、まったく捏造の伝説みたいなものがつくられることもよくあります。次にいくつか私が見つけた悲しいアイヌの伝説というのを挙げてみます。よく知られているのが、阿寒のマリモの由来談。ある身分の違う男女が、どうしても恋を認めてもらえなくて身投げをしようということで、湖に身投げしてマリモになりましたという伝説がありますが、これはアイヌの伝説として創作された和人によるお話だということが分かっています。それから網走の語源です。「この地名の語源を説明するものとして、こういう伝説があった。2人の青年から愛された女性が、どちらも選ぶことができない。2人の間で板挟みになって入水して白い鳥になって、チバシリ、チバシリと鳴きながら飛んで行った。そのチバシリが今の網走の語源だ」というような話です。それから、「乙女が身を投げた」、「子を負ったまま岩になった」、「義経に恋をしたしゅう長の娘が、義経が去ってしまったので毒を飲んで死んでしまった」。何しろ、女性が悲恋の末に身を投げたとか死んだとか、石になったとか、身を投げ過ぎというのが私の印象です。本当に同じパターンでどの話もでき上がっていて、アイヌに、はかなげで悲しげなイメージというのがあって、なおかつ、それが女性を通じて表現されている。

場合によっては、恋愛関係がある程度進展してから、最後は捨てられてしまうというように、少し性的なところが語られたりもする。ある種の消費のされ方のパターンが、ここにはあると思います。こうした話は、あまり好ましくない働きをしますと思いますが、その1つには、アイヌ民族が過去の存在であるということをもう一度印象づけることです。昔、こんな話があったんだよというふうにして、今のアイヌは語られずに昔の話ばかりが繰り返し語られることによって、やっぱりもういないものというイメージが強まっていく。もう1つは、例えば義経とか和人の貧しい青年が「しゅう長」の娘と恋をする。これは、アメリカではポカホンタスに代表されるように、いろいろな地域で入植者の男性と被入植者、地元女性の恋物語が語られます。こうした話はどこでも同じ効果を持っているだろうと思うのは、女性が男性を受け入れることというのは、象徴的に先住民が入植者を受け入れるということを表している。そこでは、人間的な関係がちゃんとできて、決して悪いことばかりじゃなかったということが語られて、しかし、悲しいかな、相手は死んじゃったんだよねというふ

うにして、今はいないというふうに解決する。

解決というのは、あえてこういう言い方をしているんですけど、先住民が普通に主体性を持ってそこにいたら、やっぱり入植者にとってはいろいろな面でバッティングが起きるので、いなくなったことになる。しかも、受け入れた上でいなくなったことになるということを説明する。非常に便利な「伝説」だというふうに思います。

問題性のポイントとして、こういうこともあります。ホストの側に和人とアイヌがいるケースですが、力関係に圧倒的な違いがある。ですから、アイヌというのは、現場で踊ってみせるとか、木彫りの実演をすとか、そういう場面では駆り出されますが、観光産業全体をデザインしたり、解説の骨子をつくったりするのは往々にして和人である。場合によっては、研究者がそこに協力することがある。そこでは、大きな、深い、そして興味深いテーマであったとしても、非常に簡単に、一言で済まされることが多いなというふうに感じています。

先ほど、北海道観光振興機構の『アイヌ文化・ガイド教本¹』のことを紹介していただきましたが、同じ年度に同財団の仕事でA4のガイドマップを作りました。ガイドマップといっても冊子の形になっていて、地図が載っていて、それから道内のいろいろな施設も写真と解説を入れて紹介するというものです。同じ業者がそれを受託して、私に監修を依頼したので協力をしました。そのときに感じたのが、まずは非常に簡単にアイヌの起源が語られる点です。「アイヌ民族は13世紀ごろに成立しました」というふうに、一言でアイヌの歴史的起源が済まされてしまいました。これは、今言ったようなA4のパンフレットとかB5を三つ折りにした、本当に小さい簡単なパンフレットにもたいてい書いてあります。これが和人の起源だったら、こんな一言では済まないはずだと思うんです。もし、さらっと「18世紀に和人が、日本人が成立しました」というふうに書いてあったら、とんでもないことだと大論争が起きると思います。

民族起源というのは、非常にいろいろな思いが交錯していて、どういう視点で語るかによって、まったく結論も変わってきますし、勝手にほかの人に結論を出してほしくない。自分の起源というのは、自分で大事に調べて考えていきたいと感じる、そういう領域だとも思います。ですから、日本国内には重要な遺跡があるということにははっきり分かっているにもかかわらず、まったく発掘がされない場所がいくつかある。例えばかつての天皇家の墓の中には発掘調査できないものがあります。発掘すればいろいろなことが分かるけれども、大事なものだから手をつけない。そこに例えば外国から調査団がやってきて、強引に発掘していったら大変な問題になると思います。しかし、アイヌについてはそういうことがわりと簡単に行われるし、非常に手軽に結論付けられてしまう。外からアイヌの歴史を規定するというときに、誰も何の疑問も持たないということが起こる。それは、やはりアイヌと和人の力関係がまったくバランスを欠いているということによると思います。

¹ (公社)北海道観光振興機構アイヌ文化分科会ワーキンググループ2019:『アイヌ文化・ガイド教本』
https://visit-hokkaido.jp/ainu-guide/pdf//ainu_guide.pdf (2022年2月1日アクセス)

もう1つは、一方的に規程されるということです。具体的には、和人についてはまったく説明がされない。特にあらためて言及されることもない。一方、アイヌについては、「アイヌは○○です」、「これはアイヌです」「これはアイヌ語です」「これはアイヌ文様です」というふうに言及される。つまり、和人は普通、標準なので触れる必要がないということですね。先ほどのA4のパンフレットを作った時、「アイヌ関連施設にはアイヌマークを付けます。こういうマークを付けて表示しようと思います」というふうに、その制作会社が提案してきたので、であれば「これはぜひ和人マークも付けるべきだ」と私は言いました。アイヌ関連施設とは、川村カ子トアイヌ記念館（旭川市）、北海道博物館（札幌市）、ポロトコタン（白老町、旧アイヌ民族博物館）、阿寒湖アイヌコタン（阿寒町）とか、ものすごく限定されていて、ほかのどの市町村にもアイヌ民族は暮らしているはずなのに、それらはアイヌとは関係ないということになっている。それから、和人については、例えばニシン御殿については何のマークも付けないと言うので、まずは両方対等に並べるところから始めなきゃいけないでしょうと提案し、和人マークを考えて、ニシン御殿に付けてくださいというふうにお願ひしたんですね。そうしたら、「和人をそんなマークで、つまり日本人を1つのマークで簡潔に表すことは無理なんじゃないですか」と制作会社が言ってきて、「じゃあ、何でアイヌにはそれができるんですか」と、ちょっとむっとしちゃいました。それで、「絶対に和人マークを考えてください」と言って、考えてもらったんですね。そういうことを通じて、いかに普段アイヌを軽く扱っているかということがようやく自覚されていくわけです。和人は普通で標準で、そんな簡単に規定されるものではないって感覚が無意識の中にあるということです。

今見てきたような、アイヌのイメージというものが非常に固定的に語られてしまうにもかかわらず、現在は描かない。これは研究者の中にも同じような感覚を持っている人がいて、今のアイヌを見せたって面白くも何ともないだろう、いるのは分かっているんだし、というふうに言われることが非常に多いです。でも、分かってもらえないから、私たちは現在のアイヌを伝えなきゃと訴えるんですけど、なかなかそれが理解されることはありません。

そして、これまで見てきたようなことを和人の悪行のように私はずっと語ってきました。たしかに、こういう期待は和人の中で生まれてきたものですが、アイヌ自身がこれを強く感じとって、内面化して、もう問うこともないほど自然にこれを感じとっていて、その異質性を自ら演じてみるということもよくあります。ですから、魔よけとか神がどうのこうのとか、そういうことをアイヌ自身が強調する。日本との違いというのを強調する。本当は違わないことでも、違うように一生懸命語るということとはよく見られます。これは、戦略的本質主義というふうに見ることもできるかもしれません。戦略的本質主義というのは、アイデンティティーの支えにするために、分かりやすい象徴をつくるということです。日本との違いがこ

ここにあるから、自分たちはアイヌなんだ。それを共有している我々は、やっぱり1つの仲間なんだということを考えるときには、分かりやすいマークがあった方がよい。しかし、そういう効果を意図してこういうことが行われているというふうには、私にはあまり感じられません。また、このことに関連する問題は、やっているアイヌにとっては収入につながるわけですから、たとえそれで自分に対する偏見を強めてしまって傷ついたとしても何か見返りがある。しかし、観光業にタッチしてないアイヌにとっては、完全に被害体験でしかない。例えば、ことさらにアイヌの「原始性」を強調している観光地に他のアイヌが行くということもあります。社員旅行でそこを訪れる。私の母が経験したことですけど、そうすると「あんた、あれと一緒になの？」というふうに同僚から言われたそうです。同じような体験をほかのアイヌがしているというのでも聞いたことがあります。この体験は、やっぱり母にとってはすごく不本意なことだったわけですね。だから、そういう経験を通して観光が大嫌いになるというアイヌは大変多い。でも、私はその観光の場である白老町のポロトコタン（旧アイヌ民族博物館）というところで、学生時代からいろいろな学びを得る機会を持ってきました。だから、私自身は観光そのものが悪いとはどうしても思えない。いい観光というものがあるはずで、それを目指せばいいんだと思って白老で働いていましたが、母からは「よりによって、あんたが白老で働くとは。がっかりした」みたいなことを言われて、観光地で働くこと自体を非常に残念がられてしまった。そういう母の気持ちもよく分かります。同じく観光を苦々しく思うアイヌからもいろいろなことを、「悪く言いたくはないんだけど」という形で聞かされるんですね。その気持ちも本当によく分かるので、やっぱり「とりあえずやればいいじゃん、とりあえず受ければいいじゃん」というスタイルは、もう脱却していかなければいけないということです。

では、何がポイントになるのかということ、やはり誰が誰に何を語るのかということ意識しなければいけないという点だと思います。リニューアルする前の旧アイヌ民族博物館は、アイヌ民族が主体となって運営する博物館というふうによく紹介されていました。しかし、解説している内容は、どうしても和人目線の解説になっていました。口頭で話すことも、展示の解説文も、どれも和人が和人に向かってアイヌを語るという文体からなかなか脱却できなかった。それはアイヌ民族博物館の解説部門、学芸的な部門をずっと和人の研究者が担ってきて、閉鎖直前にやっとアイヌが多数派になったという状況を反映しているのだと思います。そこから脱却するためには、語っているのは何者か、聞いているのは何者かということ意識しなければいけない。そしてさっき見たように、観光に従事しない、場合によっては来客としてやってくるアイヌ民族もそこにいるということ意識して、誰が聞いても違和感のない解説内容にしていかなければいけないのだと思います。

もちろん、描き方に倫理的な問題はないかということもチェックしなければいけません。旧アイヌ民族博物館には、いわゆる展示をする博物館の建物と屋外の復元した家屋の2カ所ありました。その復元家屋の方では、だいたい10分ぐらいでアイヌの昔の暮らしが紹介

されて、最後の方に女性の習慣として口の周りの入れ墨が取り上げられていました。その際、もともと白老で働いていた伝承者といわれる高齢の女性の顔写真をパネルにしたものを見せながら、入れ墨についての説明をしていました。しかし、アイヌ女性の入れ墨はかなり差別的な目で和人から見られて、アイヌ自身も大変これで苦しんできた経緯もあります。別の地域で観光に従事している方が白老を訪ねてきた際に、入れ墨の解説場面に個人の写真を出すのはまずいんじゃないのかという指摘をしてくださいました。このことがあってから、写真パネルをやめて絵画のパネルに替えることになりました。入れ墨そのものをあまり変な形で強調しなくてもいいんじゃないかと思いますが、入れ墨はやっぱり話題にしたいということなので、実在の人物の写真をやめて江戸時代に描かれた絵画に置き換えることで、多少軌道修正されたということがありました。この話でいえば、入れ墨文化の紹介で使われた写真に写っている本人にとっては、この扱いはどうなのかということを考えねばなりません。

それから、やっぱり一方に圧倒的な強い力があるということに自覚的にならなければいけない。力が弱い方は無意識に、あるいは意識的に相手にどんどん合わせていきますので、そこに力関係があるということに気付くのはなかなか難しい。男性の多くがセクハラに気付くことができないというのも、相手が自分に合わせてくれているとか、我慢してくれているということに気付けないということが理由としてありますが、同じようにこういう力関係というのは、意識して「ある」ものだと思ってチェックしていかないと、なかなか気付けないだろうというふうに思います。

そして、気付くたびにアイヌ民族に発言をしてもらおう。そういう機会をどんどん増やす必要があるのですが、根本的なところ、何を見せようかということを考える段階からアイヌ自身の参画を求めるということが、大変重要ではないかと思います。例えば、儀礼をすべて見せていいのか。儀礼の中のこの部分は、誰がそこにいてもいいが、これは見せられないとか。そういう線引きというのは今までまったくなかったんですね。やっぱり不思議な感じがするもの（儀式）が喜んで取り上げられましたので、宗教的なものばかりむしろ強調されてきたというふうに言っていると思います。しかし、あらためてそれでいいんだろうかということアイヌ自身も検討していく必要があるだろうと思います。言い換えれば、アイヌが主体性を持つ、あるいはアイヌの主体性を非アイヌは尊重するということになろうかと思えます。

2-5 近年の実践例

では、残りの時間で実践例について簡単にお話ししていきたいと思えます。紹介の中でも触れていただきましたが、アイヌ語のアナウンスをこれまで何カ所かでやってきました。実は一番初めは、旧アイヌ民族博物館の場内アナウンスでした。広い野外博物館の中をお客さんがあちこち移動しながら、時々解説の時間になったら解説の場所に集まってきます。復元

家屋の何番目でこれから解説が始まりますとか、何々高校ご一行様は体験学習館（修学旅行生などが木彫りをしたり楽器に触れたりできる場所）に集まってくださいとか、そういうアナウンスが結構頻繁に流れるんですね。そして、外国人の観光客も大変多かったのも、中国語、韓国語、まれに英語とかタイ語などのアナウンスも流れている。やっぱりここにアイヌ語を流さない手はないでしょうということでアイヌ語のアナウンスをつくりました。そして朝のミーティングでみんなでそれを発音して練習してもらって、生でマイクでしゃべってもらおうという、結構頑張った試みをしたことがありました。

それから、次に那覇に出張に行った際、日本トランスオーシャン航空という羽田と那覇を結んでいる航空会社がありまして、帰りの便はそれに乗ったんです。そうしたら、客室乗務員と機長が流ちょうなうちな一ぐちで機内アナウンスを始めたんです。それもハイサイ、こんにちはみたいな一言ではなくて、「皆様、本日はご搭乗いただき誠にありがとうございます。私は客室乗務員のハセガワでございます」みたいなことをべらべらべらっとうちな一ぐちでしゃべっていくんですね。これは、決まった内容であるとはいえ、かなり頑張った取り組みだと思いました。生の声で人間がしゃべっているということの存在感というのはやっぱり重要でして、どうしてもこれをアイヌ語でやりたいと思ったんですね。実は私は JR 北海道のアナウンスをしている男性アナウンサーの大ファンでして、あのかっこいい声でアイヌ語をしゃべってほしいなという、そういう思惑がずっとありました。幸いに、念願かなって JR 北海道でも車内アナウンスを渋い声でもらえることになった。JR のエアポートライナーでは、札幌と新千歳空港を往復するときに、出発前に「イランカラマテ（こんにちは）」という一言が流れる。それから、特急が白老駅に着く前に、「ウポポイにお越しの方は次の白老でお降りください」というアナウンスがアイヌ語で流れる。これはウポポイのアイヌ語担当職員が吹き込みをしてくれました。

それから、これは平取の関根さんというご一家が間に入ってくださいって、話をうまく進めてくださったんですけど、道南バス、特に平取町内を走っている間の路線の各停留所で、「次は平取小学校前」といったアナウンスを日本語とアイヌ語で流すということが実現しました。各停留所で録音した音声流れるんですけども、もちろんアイヌ語が流れても分からない人が、アイヌ自身でも分からない人がほとんどですので、何をしゃべっているのかということの説明するパンフレットを2種類作りました（写真1）。私はアナウンスだけでいいと思っていましたが、停留所名も全部アイヌ語にすることになって、平取町教育委員会の関根健司さんという方が大変なご苦労をなさって、元の地名を調べてくださり、ようやくでき上がりました。つまり、地名もたくさん変わってしまっていて、〇〇専門学校前といった地名がもともと何と呼ばれていたかということ町古の古い記録からたどる作業が必要でした。元の地名に戻せない所は、今の停留所名をアイヌ語訳しました。

それから、地下鉄札幌駅の改札裏のところにミナパという展示スペースがあります（写真2）。アイヌ文様をあしらった空間にさまざまなものが展示されたり、休憩できるようなテーブルとベンチが並んだりする中、大きなモニターがありまして、アイヌ民族に関するアニメ

ーションとかドキュメンタリー映像とかいろいろなものが流れています。その中で、1時間に数回天気予報が流れるようになりました。私はこれをぜひやりたかった。昔話というのは、ある意味決まったものをずっと毎回聞くことになるわけなんですけど、天気予報とか、地下鉄だから「2つ前の駅を出ました」とか、そういうリアルタイムでそこを通る人に役に立つ情報をアイヌ語で伝えるということをしたかったんです。天気予報では、アイヌ語によるお天気マークの凡例も画面に映っていて、アイヌ語で晴れのマークや雨のマークを示しています。地名もアイヌ語で表示しています。例えば室蘭というのはモルエランが語源なので、それをそのまま天気予報の地名として示しています。困るのは岩見沢ですね。岩見沢は新しい地名で、もともと今の岩見沢一帯の地域をどう呼んでいたか、なかなか特定が難しいところがあります。そういうところを少し何とかしながら、天気予報を実現していったということです。

道南バスアナウンスなどが実現したときに、結構報道で取り上げてもらいましたが、報道の中で説明されるのは「アイヌ語に触れてもらう」、「町外から来た人にアイヌ語に触れてもらって、楽しんでもらう」ということが意義として報道されていました。しかし、私は、そういうことに加え、一番はアイヌ語の認知向上であると考えています。触れてもらうということに近いですが、楽しむというよりは、日本国内に異言語があるということを知ってもらう。それから、アイヌ語を使いたいと思っている人自身が、アイヌ語を聞くことができる。聞いて、自分に必要な情報をそこから得ることができる。そういう情報を得るということと、それからアイヌ語が流れているのが当たり前になる。そういうふうにしてアイヌ語の使用範囲が拡大されていくということが、一番重要な目的だと思っています。それは、日本トランスオーシャン航空の機内放送を聞いたときから思っています。つまり、これはアイヌ自身の言語権の保障のためにやることで、そのために多数派の和人がアイヌ語に関心を持って、自分たちの暮らしているところに異言語が流れているということを当たり前を感じるようになるということが絶対に必要なことです。

おなじみのアナウンス アイヌ語では...

■ このアナウンスは、アイヌ語抄訳方言で行っています。
 ■ 赤文字の言葉は、翻訳に際して作成した新語です。
 ■ 各停留所のアイヌ語名は、座席ポケット又は車内に発出の「アイヌ語(バス停名)」をご覧ください。
 ■ アナウンスの詳細は、専用Webサイトでご覧いただくことができます。 *QRコードからアクセスできます⇒

日本語	アイヌ語	
道南バスより、お知らせいたします。	イランカラフテ、 道南バス チネ ワイタカ、チキ ス ヤン、	Irankarafite, 道南バス chine wa itak-as diki nu yan.
このバスは、〇〇から〇〇の区間、 日本語とアイヌ語で ご案内いたします。	タケツネ、〇〇 オロフ、〇〇 パノ、 アイヌ イタク シラム、イタカニ アイシラムキレ、クス ネ、	tao anakne 〇〇 orwa 〇〇 pakno aynu itak siaram itak ani a=i-sirankire kusu ne.
詳しくは、座席ポケットに備え付けの リーフレット、またはポスターを ご覧ください。	ウシ カンピオ(座席ポケット) オロ オマ ウエベケ(リーフレット) クサ トウラムカサ(ポスター) スカラシ、	usa kampio or ama uebekerama usa tutamkausisa mukir yan.
次は〇〇です。	ネイ トツタス 〇〇 オロ アコシレバ、ネ、	ney tutanu 〇〇 or a=kosirepa ne.
お降りの方は、お知らせください。	フクニ ルスイ、チキ ランヌレ ヤン、	rap-an rusuy diki ur-nure yan.
運行中、万一の急停車に ご注意ください。	バス、ホコブ ラボク、ニサツ、アッ ヒ カ アン、クス、ヤイトバシ ヤン、	バス hoyubu rapokke, nisaatsu as hi ka an kusu, yayitupa yan.
ここまでの区間は、日本語と アイヌ語でご案内いたしました。	テ、パノ、アイヌ イタク シラム、 イタカニ アイシラムキレ、ハユ、ネ、ウ、	te pakno aynu itak, siaram itak ani a=i-sirankire hawe ne xa.
ありがとうございます。	イヤイラカレ、	iyayra,ka-re.
〇〇経由〇〇行きます。	タケツネ、〇〇 カリ、〇〇 ランノ アツバ、ネ、	tao anakne 〇〇 kari 〇〇 urno arba a ne.
到着をお知らせいたします。	チレンカレバ、ウイナ ヤン、	chirenkarep uyra yan.

※ 札幌 五輪駅 道南バス 先住部 道南バスセンター 道南バスセンター 道南バスセンター

お問い合わせ
 「イランカラフテ」キャンペーン推進協議会事務局
 (内閣府アイヌ関係官庁連絡室北海道分室)
 ■所在地 札幌市北区北条通2丁目 札幌駅1台階5号
 ■電話 011-708-5161
 ■Webサイト
http://www.ainu.or.jp/event/direct/2018aynu_itak_ani_a=i=sirankire_kusu_ne/bus01.pdf

道南バス
 高速ひだか号・特急ひだか号・日高富川高校線

**アイヌ語で
ご案内します**

**アイヌ イタカニ
アイシラムキレ クス ネ**

アイヌ語でご案内する便

- 高速ひだか号(日高ターミナル～札幌駅前ターミナル)
 - ▶ 8:30 日高ターミナル 発 ▶ 15:45 札幌駅前ターミナル 発
- 特急ひだか号(日高ターミナル～苫小牧駅)
 - ▶ 7:50 日高ターミナル 発 ▶ 14:25 苫小牧駅 発
- 日高富川高校線(富川高校駅～日高ターミナル)
 - (往) ▶ 18:00 富川高校駅 発
 - (帰) ▶ 8:42 日高ターミナル 発 ▶ 12:22 新日高 発
 - ▶ 15:00 日高ターミナル 発

「イランカラフテ」キャンペーン推進協議会
 (道南バス) 二風台駅前ビル

写真1 道南バスアイヌ語アナウンスのパンフレット

(出所:「イランカラフテ」キャンペーン推進協議会事務局 https://www.ff-ainu.or.jp/event/direct/2018aynu_itak_ani_a=i=sirankire_kusu_ne/bus01.pdf)

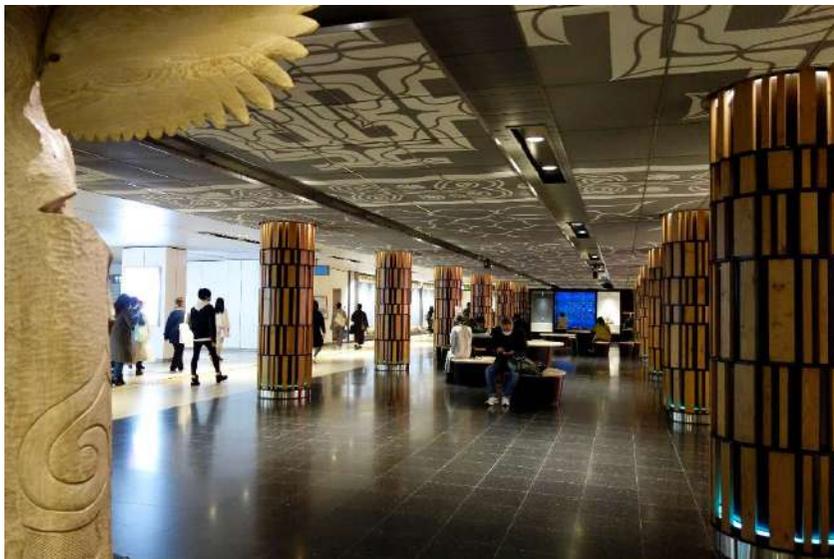


写真2 札幌駅地下歩行空間にあるミナバ (撮影:岡田真弓)

ウポポイにおける取り組みについても少しだけ話したいと思います。まず芸能公演の話を見せてください。ウポポイの体験交流ホールでは、芸能を紹介する2種類の公演を行っています。とくに気を付けたのが、まずは uwerankarap というアイヌ語の伝統的なスピーチがあるんですけど、それを職員一人一人ができるようにし、一人一人違ったメッセージをそこに込めるということをしました。必ず違う必要はありませんが、自分が言いたいことを職員が自分で考えて盛り込みました。ここで重要なのは、働いている職員の中には和人とアイヌと両方いることです。だいたい半々ぐらいいます。しかし、ほかの観光地も含めて、来場する人は、そこにいるのはみんなアイヌだというふうに思うわけです。だから「あなたはアイヌに見えないけどアイヌなの？」という質問がされたり、あるいは「自分は和人だ」と言うと「にせものがこんなことをしていいのか」とみたいな非常に侮蔑的なことを言われたりします。それは和人職員にとっても大変つらい体験になっています。ここで和人が働いていることも、積極的な意味を持っているということを伝えることが、この施設の大きな役割だと思うんです。協働でアイヌ文化の復興と普及を行っていく。その中で、民族的な背景の違いというのをお互いによく知りながら、一緒に働いていくということが、民族共生の1つの体現になると思いますし、それをここでやっているんだということをスピーチという形で、自分たちで表現することに挑戦しています。

それからもう1つは、クマ送りという儀礼の流れをダイジェストで再現するプログラムがあります。当初は、シャツとか着ていない、腕時計とかしていない、眼鏡もしていない、「本当のアイヌの儀式空間」を表現するというのが原案としてありました。和人もそこにはいないという設定です。そういう状態は少なくとも200年以上前じゃないとないわけです。しかし、200年前の踊りがどういうものだったのかというのは、残念ながらまったく分かりません。鳥の踊りがあったとか、そういうことぐらいは分かりますが、芸能というのは非常に短いスパンでどんどん変化していきますので、20年前どうだったかということをきちんとたどろうと思ったら、結構大変です。それが戦前になったら、もう分からない。200年前になったら、まったく分からないと言った方がよい。だからそれを、「200年前のものを再現しています」というふうに言うのは、やはり看板に偽りありになってしまうわけです。むしろ今多くのアイヌがクマ送りを経験したことがない。クマ送りの意義も自分たちであえて勉強する機会を持たなければ分からない。この場面ではどういうことを祈ればよいのかもまったく分からない。そのようなことを無理してするよりは、それを取り戻していく過程をここで公開しているというふうに言った方が事実に近いし、胸を張ってやれるんじゃないか。今ここでやっていることは、将来的にクマ送りをしようと思ったらできるようになる。その知識を職員が仕事を通じてもう1回構築している様子を公開する。だから伝承がここにはないんだ。今、回復をしようとしているということを前面に出した方がいいんじゃないかというふうに言ったんですね。それはやっぱり結構当たりだったなと思っています。あとは、儀礼の雰囲気を出すために、アイヌ語しか使わない。そして、アイヌ語でアドリブを入れる試みもしました。ただ、この舞台は参加する人数が大変多いので、密を避けるため

にずっと公演中止になっています。昨年の秋から全然できていないので、その点は大変残念に思っています。

あとは、国立アイヌ民族博物館における展示品の復元についてお話しして終わりたいと思います。博物館の展示では、いろいろな地域のアイヌの工芸家が複製などの形で作ったものがたくさん展示されています。複製を通じて技術を復元し、取り戻していくということも、この博物館の機能の重要な側面です。特に私がかかわったのは、この仔クマの装飾です（写真3）。クマ送りで送られるクマは装飾品を付けていましたが、クマ送りで用いられた装飾品関係のものは、日本国内では網走の北方民族博物館に1点しかありません。それから、耳飾りと頭飾りがあって、頭飾りは上野の東京国立博物館に1点、耳飾りは北海道大学植物園博物館や大阪の国立民族学博物館とかに何点かずつありますが、すべてそろいの資料というのは、この網走に1点しかありません。二股の木は、クマをつなぐための杭です。これは日本国内には模型しかなく、実物は世界のどこにもありません。この杭は非常に巨大で、巨大過ぎるがゆえに博物館に収蔵できない。だから模型は残っていても、実物はもう地上に1つもありません。これを調査を通じて、作り方から何からを確かめて復元し、展示に至りました。

クマの頭飾りは、ロシアのペテルブルグにある資料をもとに再現しました。クマの帯には小さい袋がたくさんついていて、ここにクマのための食べ物が入っていますが、これは網走の資料をもとにして作りました。大きな杭は、これは当時の写真と模型資料の観察をもとにして復元したものです。



写真3 仔クマつなぎ杭（提供：（公財）アイヌ民族文化財団）

アイヌを主体にした観光や文化表象において何が重要かという、やっぱり目的がどこにあるのかということだと思います。アイヌ政策の場合もそうですし、観光の場合にもそれが重要だと思います。マイノリティー自身が自尊心を回復していくためにやる。以前の観光

のあり方というものは、本当に尊厳を削るような紹介の仕方だったわけですが、そうではなく、当たり前の人間としての価値というものを確かめるような、喪失してしまったものを回復していけるような、そういうことが大前提として考えられてなければいけないだろうと思います。それから観光地で働く人は、そこに至るまでにさまざまな差別体験をしてきています。自分自身が直接差別を受けたり、あるいは誰かが差別を受けたりしていることを目の当たりにして、自分の属性を隠すように生活してきた。そういった人々が観光地で働いて、そこでもう一度差別的な体験をするというのは、もう目も当てられないことです。まずはそこで働いている人にトラウマがあるということを想定して、そのケアや自分自身で回復していくための取り組みも含めて考えられなければいけません。そういうことを実現していくためには、観光にかかわる意思決定の重要な場面にマイノリティーが参画していることが必要だと思います。

本日は、主にアイヌについてお話しました。しかし、今日お話したポイントは、最初の方でアフリカ系の文化表象について触れたように、多くのマイノリティーに共通する事柄ではないかと思っております。ありがとうございました。

3. ディスカッション

岡田: ここからは北原先生のご講演内容をもう少し掘り下げていくために、対談形式で進めていきます。

北原先生のご講演で重要なポイントだと感じた点が3つありました。まず1点目が、マイノリティー文化観光、あるいはアイヌ文化観光においては、内向きの需要と外向きの需要があるという点です。ここは、一般的な観光と少し異なります。

例えば、明治以降のアイヌ民族と和人に関する歴史的背景や観光が非常に多岐にわたる事業体との連携によって成り立っている産業であるという理由から、必ずしもホストが文化伝承者（アイヌ民族）、ゲストがそれ以外の人たちという単純な関係性にはならないという指摘がありました。こうした状況の中で、観光を通じてアイヌ民族や文化をどのように伝えていくかが一つのポイントになると思いますが、この点について補足があればお願いします。

北原: 内向きの需要というのは、例えば和人の場合、小学校に入る前から保育所とか幼稚園などで日本語を教えてもらう。読み書きを教えてもらう。あるいはお遊戯などを通して自分たちの文化などを教えてもらうということができる。小学校に入ると、さらにそれが進んでいくわけですね。ところが、アイヌや琉球といった日本の中のマイノリティーは、公教育の中で自分たちについて知る機会がほとんどないわけです。

ですから、例えばウポポイに修学旅行生がたくさん行っていますが、旅行生の中にアイヌの児童がいた場合、ウポポイは初めて自分について知る機会になる。学校でもアイヌ文化に関する授業をやりますけれども、先生も（アイヌ文化について）十分な訓練を受けずに教員になっていることが多いので、飛ばしてしまったり、あるいはちょっと不完全な形で紹介されたりする。それも4年生の間の数時間だけ。だから、じっくりと自分の文化について知ったり、触れたりする機会として、観光というのは重要な場合が多い。

私の場合も、学生時代に白老に何度も通って、そこで儀礼に参加させていただいたことが今の研究に非常に生きているので、そういうアイヌのための場所でもある。その深さなんか少し違いがあるということで、どの程度のものが求められるのかということにもバリエーション、多様性があるんじゃないかということです。

岡田：北原先生のように、当事者として博物館や観光地でアイヌ文化に触れたことによって、アイデンティティーに気が付いたり、それを強くしたりするケースもあると思います。一方で、従前のように初めてその文化に触れる人が、新しく文化を学ぶ場合と、当事者が学びに触れて自身のアイデンティティーを強化するといった場合の文化交流としての観光が果たす役割、言い換えると観光を通して発信される内容や見せ方は異なってくると考えられます。

北原：ホスト側にもいろいろなそこ（観光）に至るまでの経験があって、自分のニーズというものもあると思うんですね。例えば本当に踊りが好きで観光地で働いている人もいるし、工芸が好きで働いている人もいるので、自分自身が何が楽しくてここまで来たのかということが出発点になるでしょうし。私の場合は樺太がルーツなので、アイヌ文化とはこうですというふうに、白老の文化だけとか平取の文化だけという紹介の仕方だと、私のニーズと合わない。

旧アイヌ民族博物館は、アイヌ全体を網羅的に扱うということを一応モットーとしてやっていたので、そこに行くと、樺太の文化に触れることもできました。「これが自分の、アイヌの中でも特にこれが自分のものなんだ」というふうに多様な学びができるということが、もう1つ大事じゃないか。外向けにはどうしても大ざっぱな紹介になりがちですが、あえて多様性というものをきちんと紹介することで、内向きの需要にも応えられるし、外向けにも丁寧な紹介をすることができると思います。

岡田：今の点に関連した質問が会場からありました。ご講演の中で、白老の旧アイヌ民族博物館で女性の入れ墨の解説をする際に、最初、実際の写真を使っていたが、途中から絵に替えたというお話がありました。伝統文化をどのように説明するか、どのような資料を見せるかという検討がなされたようですが、例えばこれを教育の現場に置き換えたときに、民族文化をどのように説明するかという検討にもつながるように思います。こうした検討は教育

現場でもなされるべきでしょうか、という質問が来ています。

北原: ありがとうございます。やっぱりアイヌについて語るときに、精神性についてというのは非常に多いんですね。ほかにもいろいろ語るべきことはありますが、やっぱりこれまで長く、そこを特に紹介してきた蓄積がある。例えば各地域のアイヌ協会とかアイヌ文化保存会という組織があるんですけど、そこの方が小学校に行って、普段は観光の仕事をしているわけじゃないけれども、地域のゲスト講師として子供たちに教えるということが増えてきています。そうした際にも精神性を語らないと、アイヌ文化を語ったことにならないんじゃないかというふうを感じる人が多いようです。それを言わないとさまにならない。あとは宗教儀礼には装飾品や晴れ着などの華やかなものが多い。なので、やはり目を引くということで、それを取り上げやすいということもあると思います。しかし、宗教儀礼ですので、それを聞く学生や生徒の中にもいろいろな背景を持った子供がいますから、一律に経験しなきゃいけないというものではないだろうとも思います。

また、経験する以上は十分敬意を持たなければいけないと思いますが、学校の授業ではそういう心構えがない場合も少なくないと思うので、そこに無理に大事なものを一律に導入しなくてもいいんじゃないか。もっと手軽に触れやすいものというのが選択されていくべきだし、そのための研究が必要なんじゃないかと思います。

岡田: 次に 2 点目に移りたいと思います。アイヌ民族による観光、アイヌ文化観光を含むマイノリティー文化観光において、文化伝承あるいは振興の重要性というのは看過できないと思います。実は、こうした指摘というのは国際的にもされておりまして、国連の世界観光機関 (UNWTO) が 2019 年に出した「先住民族観光の持続可能な発展に関する勧告²⁾」にも、先住民族観光が文化伝承や文化交流に果たす役割の重要性が指摘されています。

本日の北原先生のご講演や UNWTO の勧告を照らし合わせると、観光活動を通じた文化伝承は、マイノリティー文化観光を特徴づける重要なポイントです。今後、北海道のアイヌ文化観光における観光を通じた文化伝承や文化振興について、どうお考えでしょうか。

北原: もともと文化というのは、どんどん創造されていくものです。だから、その文化が力を持っていれば、活力を持っていればどんどん変化していくのが当たり前だと一般的にいえます。だとすると、200 年前のものが本物だから、それを見るのが一番良いという考え方は、そもそも文化の実態と離れていることになります。一般的には、「伝統」が素晴らしい

²⁾ UNWTO World Committee on Tourism Ethics 2019: *Recommendations on Sustainable Development of Indigenous Tourism*. <https://www.unwto.org/doi/pdf/10.18111/9789284421299#:~:text=The%20Recommendations%20on%20Sustainable%20Development,and%20experiences%20within%20their%20communities>. (2022 年 2 月 2 日アクセス)

と考えられています。伝統というものをもし解釈するとすれば、私はよく俳句や和歌にたとえます。俳句は五七五みたいな長さのルールが決まっています、それを踏まえる。それから季語を入れるとか、気の利いた言葉を選ぶというのが約束事としてはありますが、歌そのものは毎回「新しい」ことに価値があるとされます。伝統はそれに近いものだと思うんですね。

だから、要するに「同じである」ことが大切なのではなくて、それを受け取る人を楽しませることが一番大切。クマ送りについても、いろいろな芸能の演目が新しく加わりながら常に変化してきたはずで、その変化を肯定的に示すという意味でも、復元的にやっていく。そして、未来志向のクマ送りだから、新しい演目や要素でも楽しければ、クマの神が喜んでくれそうなものはどんどんそこに入れていくんだという提示の仕方をする事で、停滞的で固定的な伝統観念みたいなものを脱することができるというふうに考えてやってきたわけです。

それから、文化伝承と観光の視点でいえば、例えば、実際には来場した人に見せるためには、15分から20分ぐらいのステージで見せることが必要になります。一方で、15分ぶんの踊りしか知らなかったら、何かとても寂しいですね。アイヌ文化にはたくさんの歌、踊りがあるので、実際にはステージでやるのは15分間だけど、自分はレパートリーをたくさん持っていて、その気になれば2時間でも3時間でも延々と披露できる。そういう豊かな伝承を自分が持っていて、そこからいいところを選び取って、あるいは毎回組み合わせを変えていろいろなものを紹介していけることが豊かな伝承につながると思うんです。

だから、博物館に勤務する人は、まずは新しくそこで仕事としていろいろなことを覚え始める。刺繍の人は本当に分業みたいに刺繍だけを覚える。木彫の人は木彫だけを覚えるというふうになりますが、勤務する中で覚えるものを増やして行って、自分自身にとっても、個別の要素が横につながっていく豊かな伝承というものができていくというのが望ましいと思います。

岡田：2000年以降、加速化した政府によるアイヌ文化振興やアイヌ民族に関する施策中でも、文化伝承と経済活動を両立するツールとして、観光に期待が寄せられ、関連する支援策も取られてきました。その際に、観光産業だけに支援が向くのではなく、文化観光の根底を支える新しい文化の振興というところもきちんと支えていかないと、バランスがとれていけないということでしょうか。

北原：ほかの文化振興と観光と、完全に分けなくてもいいと思うんですけど、観光地というのもそこが学びの場であって、学んだことを紹介していくことができます。それは、大学で研究している人間が研究の幅を広げて発信していくということとまったく同じだと思います。ただ、こういう施設にそれが限定される必要はなくて、それぞれの地域でそれぞれの学びというのを支援するというのが一番いいと思います。

岡田:ここでフロアからの質問をご紹介します。従前の観光では、ゲスト側がアイヌに原始性を求めたり、自然との共生といったイメージを求めたりするという点が指摘されていました。新しく開設されたウポポイにおけるアイヌ文化の表象において、上記の点はどうなったと思いますか。

北原:なかなか脱却できないところもあると思います。分かりやすくアイヌってこういうものですよというふうにくくって、しかも分かりやすくする分、現実とは乖離しますし、面白おかしく脚色されたような描かれ方になるということも避けられないと思います。これを脱するためには、例えばやってくる側の主観を問い返すということが必要になってくる。あなたは、アイヌである私を見にきたけれども、あなた自身はどういう人ですかというような、そういうコミュニケーションが必要になってきます。

さっき私がいくつかの文化の例で紹介したみたいに、こうやって見てみると、和人もアイヌも同じじゃない？じゃあ、完全に同じかといったら、それぞれアイデンティティーがあるんだから、その違いはどこから来るのだろうか、一人一人の相手に応じたコミュニケーションをしなければいけない。それは相当大変なことで、時間を食ってしまうので、たくさんの方をさばかなければいけないポジションの人は、どうしても紋切型の語りになりやすいですね。

です、こうした対策は現場ではないところで何かしていかなければいけないと思います。仮に、1人で100人の来客をこなさなきゃいけない、けれど、丁寧な解説のために1人当たり30分話さないと行われたらそれは不可能なので、どうやってそれを解決するかというのは、運営側が考えていかなければいけないことだと思います。

岡田:ありがとうございます。3点目として、本日も指摘いただいた従前の観光における課題点を解決するためにも、当事者あるいはコミュニティと観光事業者のパートナーシップは欠かせないと感じました。UNWTOの「先住民族観光の持続可能な発展に関する勧告」をはじめとする先住民族観光をめぐる国際的な議論でも、先住民族とのパートナーシップの重要性が指摘されております。恐らく北原先生が携われた北海道観光振興機構の『アイヌ文化・ガイド教本』も先住民族と観光事業者とのパートナーシップをめざすため、観光活動における誤解や意識しない差別発言などが起こらないよう、適切な情報発信をするためのガイドとして作られたと理解しています。

実はこうした観光産業向けのガイドは、ほかの国でも出版されています。例えば、カナダのブリティッシュ・コロンビア州の先住民族観光協会が、観光事業者向けに先住民族に関する観光を企画する際に、観光事業者が留意すべきチェックリストを作っています³。また、太平洋アジア旅行協会も世界先住民族観光連合とともに、先住民族観光と人権についての

³ Aboriginal Tourism Association of B.C. n.d: *Aboriginal Cultural Tourism Business Planning Guide*. <http://cms.spincaster.com/siteFiles/85/files/ACTBPG.pdf> (2022年2月2日アクセス)

チェックリスト付きガイドを作っております⁴。こういう海外でも日本でも今進みつつある観光事業者と先住民の公平な連携のための仕組みづくりというのは、私自身も非常に関心があって、これからきちんと調べていきたいと思いますが、この点についてお話を伺ってみたいと思います。

まず連携のあり方として、例えばアイヌ民族と和人が一緒に観光業をつくっていくという可能性についてはどう思いますか、という質問がフロアから来ております。これに関連し、私からも一つお尋ねします。北原先生もご指摘されていたとおり、先住民観光には先住民が企画段階の段階から、明確に意思表示ができるようなコミットメントのあり方が求められるという考え方が散見されます。現在の北海道で、こうした連携をめざす際、望ましい連携のあり方や仕組みなどについてお考えがあれば教えてください。

北原：1つ目は、一概には言えませんが、当事者と非当事者、この場合はアイヌと非アイヌの立場があったとして、やっぱりアイヌの方がリアルに自分のアイデンティティーということを考える場合が多いと思います。私の場合だったら、樺太の中の西海岸の、西海岸の中にも南と北があるので北の方の、特にオタスッというところが自分の地元なので、そのことを、より絞って知りたいとかですね。ほかの地域のアイヌ文化が分かっても自分は満たされないんだと。いろいろな細かいニーズがあるんですね。

それに対して、非アイヌの方は「そこまでいいわ」ということもある。別にそれが悪いというわけではなく、ただ「そこまで細かく関心は持たないけど」というスタンスが多いと思うんです。なので、わりとパターン化された、要約されたアイヌについての知識を持っていることが多いと思うんですけど、それをもう少し情報を提示する側が、分かりやすく多様性や深みを紹介できるような環境をつくっていくと、和人として観光に携わる人も、アイヌ文化とかアイヌ民族のいろいろな可能性に気付くチャンスが増えると思います。そうすれば、自分なりにここを紹介しようというような意欲も出てくると思うんですね。そうならなければ、やっぱりこんなものですよという通り一遍の説明で済ましてしまうということになりがちだと思います。だから研究と情報の提供こそが、まずは重要だと思います。

それから、今日お話ししたような、「当事者じゃなければ気付かないけれども、実は傷ついています」みたいなことの共有とか、いま起きていることの共有は、やはりもう1つ必要でしょうし、まったく悪気なくアイヌについてこうやって語っていたことが、隣で働いている当事者を傷つけていたとか、そういうケースって結構ありますので、その共有も必要です。

来場者に対する事前の情報提供って大きいと思うんですね。例えば、私はハワイのポリネシアンカルチャーセンターというところに一度行ったことがあるんですが、あそこはハワ

⁴ Pacific Asia Travel Association & World Indigenous Tourism Alliance 2014: *Indigenous Tourism & Human Rights in Asia & the Pacific Region: Review, Analysis, & Checklist*.
<https://www.ecotourism.org.au/assets/Resources-Hub-Indigenous-Tourism/International-Indigenous-Tourism-Human-Rights-Review-Analysis-Checklists.pdf> (2022年2月2日アクセス)

イだけではなくて周囲の太平洋の島々の文化を紹介している。隣に大学があって、その学生の中にはそれぞれの島出身の学生がいるんですね。カルチャーセンターでアルバイトをして、自分がトンガの学生ならトンガの文化について学びながら、それが仕事にもなって、学費や学生生活を維持していく上での収入にもつながっていくという、そういう施設の意義というのを行く前にレクチャーしてもらっていたので、この施設の意義を理解できたと思うんです。だから、短くてもいいので、事前の情報というのはすごく重要です。それによって来場者の振る舞いも大きく変わってくると思います。

あとは、旧アイヌ民族博物館で働いていたときに、見学者のマナーがすごく悪いことが気になりました。大切な展示資料を無造作に触っていくとか、イナウという大事な、神様にささげたものを引っこ抜いて振り回して遊ぶとか、そこは「何をやってもよい原住民村」みたいな雰囲気だったんです。同じ人がたぶん美術館に行くと、展示品が露出しているにも触らないと思うんですね。引っこ抜かないと思う。だから、そこがどういう施設なのかというメッセージというのはいろいろな形で発せられていて、行く前にもう態度が決まってしまうところがあると思います。

それから、従業員がエスニックな格好をしているのか、それとも美術館の職員然としてちょっとよそ行きの格好をしているのか。それによってもかなり心理的な態度って変わってくる。だから、ヨーロッパふうにする方がいいということを言いたいわけじゃないんですけど、いろいろな演出というのも来場者の態度を決めることにつながっていく。だから、アイヌ文化らしさを何か込めながらも、見る側が敬意を持つような演出も考えてみる必要があると感じてきました。

岡田: ありがとうございます。北原先生のご講演の中でも、アイヌ文化における多様性についてのご紹介がありました。アイヌ文化観光において、地域の多様性を発信することは当然のことながら、地域の多様性に配慮することは文化観光におけるマナーにも関連してくることかと思えます。そうした場合、『アイヌ文化・ガイド教本』のようなガイドや指針は良質な学びにつながる文化観光にとって必要な手段であるように思いました。『アイヌ文化・ガイド教本』を元手に、地域ごとの文化的多様性に配慮した観光振興が検討されるようになると、各地のアイヌ民族と観光事業者の連携が生まれる可能性が高まると推測されますが、このあたりはいかがでしょうか。

北原: あれはかなり大ざっぱなものなので、それが今度は地域の実情に合ったものがつくられていくといいと思います。あの中で1つ気を付けたのは、例えばアイヌの起源ってすごく簡単に語られてしまうことをさっき申しましたけど、ガイド教本では、北海道島に人間が暮らし始めたところから今に至るまで、ずっと一貫したアイヌの歴史だと考える立場もあるということを示したんです。

それが本州の場合であれば、みんなそういう感覚を自然に持っていますね。例えば、かつ

て1990年代に20万年前の石器が出てきたと騒ぎになって、結局、それは捏造でしたが、なぜ日本中があれで熱狂するかというと、20万年前に誰がいたとしても、それは自分たちのルーツに違いないという信念があるから。だから、連続性が証明できなくなつて構わない。素朴な感情として、この土地に昔いた人は自分の先祖に違いないという、それが一般的な歴史観だと思いますし、捏造の部分以外は、全然それで悪いことではないと思います。

ということは、アイヌも自分たちの歴史をそういうふうを考える権利がある。これは当たり前のことですが、なかなか確認されない。例えば、そういう歴史観1つとっても立場によって大きく変わるし、相手の立場に配慮する必要があるということをガイド教本の中では示しました。あとは、本当に日常に染み付いてまったく意識されないような、ちょっとした言葉遣いとか、無意識に例えば和人を主体にして語っている点。「アイヌ文化には文字がない」、「アイヌ語には文字がない」、「アイヌ文化には稲作がない」というように、「○○がない」という語りが非常にアイヌの紹介には多いですが、それは本来おかしいことです。例えば私という人間を紹介するときに「北原にはしっぽがない」、「北原には角がない。その代わり、手がある」と言ってみるのはすごくこっけいなことだと思うんですね。

「北原には手がある」、「鼻がある」、つまり紹介する対象に即したことを言えばいいのです。「アイヌには口承の文化がある」「アイヌには採集と狩猟に分散的に依拠した生活スタイルがある」と言えばいいのであって、他の文化を基準に「○○がない」というのは、特徴を明らかにする1つの手段だとは思いますが、それによって何かすごく主体性がないような紹介のされ方になってしまうというのは、ちょっと陥りがちなことであるので気を付けたい。そういうありがちな表現みたいなものをまとめて後ろの方に付録として付けたんですけど、そういう形で仕事をしている方に気付いてもらうきっかけになればと思います。

岡田:ありがとうございます。全部のフロアからの質問にもお答えできなかったんですけども、そろそろお時間も過ぎましたので、本日のオンラインフォーラムを閉会させていただきますと思います。北原先生、本日はさまざまな観点から重要なポイントをお話しいただきまして、ありがとうございました。

北原: どうもありがとうございました。